冠婚葬祭の特殊性と社会関係

＝大野川河口のキリシタン部落＝

富来　満

結婚が成立の要件として、信仰宗旨やその属している寺院を考えて、親族関係に及んでいる事をも考えてみたい。年がたつにつれて、部落とのつながりが多くなり、鶴崎市川添の広内（ひろうち）部落五、六〇戸と坂ノ市町原部落（両部落との距離は約一里）は、殆んど親族のない家はないと言う位で、また寺院でも、殆んど同一宗旨である。両部落全体が殆んど親族関係をなして来た。小佐井部落では徳川時代より藩の所領が臼杵領と肥後領にて異るが、言語、宗教的行事、結婚の様式などよくにている。松岡大字毛井の寺壇組織についても、現在も他の市町村より同地に転居したものは、居住期間中同地の龍泉寺の壇徒になる事になっている。同地安部酒場の家では真宗専想寺（大分県鶴崎市）の壇徒より同地に転じたもので、同地龍泉寺に所属したものの、年忌には今もなお専想寺より寺僧がお参りしている。

なお臼杵領内の一般的な寺壇組織を見ると、鶴崎、三佐などは臼杵領でないために、比較的に少いが、領内のいずれかの寺院に属する事になっている。

○大分郡戸次町　（臼杵善法寺壇徒）　百　軒
○鶴崎市川添　（同　）　十　軒
○大野郡戸上村方面　（同　）　数　軒
○同　川登方面　（同　）　二、三十軒
○津久見市上浦　（同　）　十　数　軒
○大野郡戸上村方面　（鶴崎市専想寺壇徒）　十　数　軒

このように大野川河口にそい、或は川を渡って数里はなれているので、現在では非常に不便である。この様な史実に基く宗

旨又は寺壇組織について由来を知らない部落民は今もなお「飛び地」と呼んでいる。また切支丹信仰より来たと思われる観音について、考えてみたい。

日豊線高城駅より徒歩二十分大分市の方向に進むと「高城山」と言われる所がある。場所は鶴崎市千歳にあり、「高城山観音院」と言われ今は天台宗の寺院である。九州西国九番の霊場で安産祈願のききめが多いと言うので参詣者は遠近よりおしかけて絶え間がない程である。本尊は如意輪観音であるが、元来キリスト教のヨハネを祠つたものと云われ、当時官憲の取締りがきびしかつた為に、それを恐れて仏堂とし民衆のお参りをすすめたと言う。その由来を知らぬ一般民衆は子安観音と言うので、昔より参詣者の多い仏堂である。なお鶴崎市川添広内の九六九位山の円通寺は昔、百済の僧の建てた寺だと言われ、本尊は千手観音で宗旨は高城山と同様、天台宗の延暦寺派に属する寺で、出産した子供のために、乳の出る祈願をすると言う寺である。切支丹と深い関係はないが、性的に面白いものもある。岐路にわたるので略すことにする。臼杵藩所領区域で大野川沿岸地帯は旧藩時代の所領が、当時各藩主の参観交代の・舟運に必要があつたと思われ、各々藩主が任意に土地を交換したため、大いに区々たるものである。現在まで寺壇関係や婚姻に判然と現われているものが多い。鶴崎市大字三佐より竹田市まで十三里と言うが、岡領で、三佐と言う地区に従来あつた家で、他の地区の寺院の門徒は一戸も見られない。なお、竹田市には古い縁故のあるわけか、今でも両地間には、婚姻関係のある家も決して少くない。

単に三佐地区だけでなく臼杵藩所領区域が宗旨関係の根本となり、寺壇の関係が明らかに分明されている。二里、三里離れた土地に寺の門徒をもつのも当時以来の領分関係によるものであるし、縁組関係・方言・なまり語まで同一なものが多い。

大野川は源を祖母に発し、鶴崎市にて別府湾に入り、全長八十粁余りのこの川が、民衆の生活にどれだけの利益をもたらしているかは、識者の解する所であろう。古来、県下丈でなく遠く延岡、熊本、西は肥前の島原や幕府の直轄など、多くの藩の所領に分れていた。藩が異るだけ、また政治、経済、人情、風俗、習慣、方言などにかわつた特色がある。わけても信仰からきた民俗の特異性はまた格別なものである。それで切支丹の分布は、どこにでも見られるが、臼杵藩が最も信者が多かつた。

どのように他から制圧があつても、信仰がかわらぬのみか、それが却つて信を増すものである。従つて信者間の意気、団結が強くなる。その意志をうけた子孫であるだけ、特異性があるが、今では各自の祖先が信者であつたと言えば、却つていやがられる程である。

毎朝洗面をしたら、手拭で顔をふくまえ、太陽の東天に昇るのを合掌礼拝する人は決して少くない。やはり早天に先ず天にある神を拝している訳にちがいない。次に宗旨の如何を問わず姙婦は何回子供を生んでも、先に述べた様に鶴崎市千歳の高城山、子安観音に参つて安産の祈願をする。民衆は誰も切支丹観音などと言うものもなく（無論そのような観音の名前もある筈がないが）、八十パーセント以上の姙婦が現在も参詣しているのを見ても、昔からの伝統で、大きな特色であろう。子供の遊びでも分るように（鶴崎市川添地区、坂ノ市町丹生地区）、独楽打ち遊び、ビーロン玉遊びで、その目標の中心点を決めるのに、十を書いて玉あての目標としたり、うそをつかない約束に、相手と共に目の前で空中に十字を書いたり、蜂から刺され痛む時や暗い所に行く時に「十を切る」と言つて虚空に指で十を書いたりするのも、遊びの中に見うける。時代にかかわりのない彼等の生活の中に切支丹の信仰の根強い伝統が、今なお続いていると考えても過言ではあるまい。こうして信仰の上から意志の疏通、一致協力等の具体的なあらわれが、やがて結婚の上にはつきりと見える。前に述べたように、宗門同志とか、寺の門徒同志とかで結婚し、更に親族、知人、寺の住職などの斡旋、紹介等により、次第に増加し、今日では其の数が相当に多くなつている。例えば鶴崎市三佐、家島部落は殆んど二百戸が真宗で、坂ノ市町大字里部落は妙連寺門徒約百二十、光国寺約四十、鶴崎市専想寺二十戸で他の宗旨は極めて少く、縁組の状態を見ると、家島部落と坂ノ市町小佐井と縁故のある者は約四十パーセントに及び、両部落で姻族関係のない家は殆んど稀である。葬式については昔、切支丹の検視がきびしかつた当時行われたと思われる、多数の僧侶が会葬する事で今では「ふぎん」と言つて近所や因縁のある寺を招く例がある。最も古いのは鶴崎市三佐の五ケ寺で寺同志で連絡し合い、家で主な人の葬式には全部の住職が会葬する事になつている。

方言訛語にも切支丹と関係あるものがあるが、信仰の力の偉大な事は論をまつまでもない。また相手方をいやしめる風習も見かける。切支丹の踏絵の絵像を「外道仏」と言つていたが、今では破戒、邪魔などを意味する常語として「げどう」と言う

方言を使つている。また鶴崎と臼杵言葉もはつきりしていて、鶴崎附近一帯では、ダ行とラ行を混同して主にラ行を用いている

1. ローロヨロシクたのみます。
2. ランランぬくうなりました。
3. （リンリキ車）（人力車）にのろうや。
4. そうれすか。

右の様に、鶴崎のレロレロ言葉と呼ばれている程で、中年以上の人々は日常使つているわけで、臼杵言葉としても左の様に常語として使用している。

1. ごめんなんしい。
2. お早ようござりやんする。又は、お早ようござんする。

以上述べたように大野川河口一帯には、切支丹の特異的なものは少くないが、社会に亜影響を与えるようなものは見あたらない。敬神崇祖の念などは余程あつく、信仰の方では、九十パーセント以上が仏教で、他の信者は一割にも足らない。その昔盛んであつたと言われる切支丹も今は全く跡をたち、河口には大分市を除いて、教会の一つも見られない状態である。従つて自分達の祖先が切支丹の信者であつたという事も意識してはいないが、反面、仏教の教理を理解し信じている者も少い。西九州の一部に見られるような、キリスト教を隠密に信仰しつづけるような者もない。大体に於いて大衆の生活が色々な迷信に陥つていない事から考え、祖先からの伝統をうけていると言えよう。

あとがき

切支丹宗門改めなどに依る宗教的な行事を基盤にして考察したが、特に沿岸各部落を踏査して文書或は古老の話等を採集し婚姻が宗旨関係と深いつながりを持つている事が分つた。親族の構成、所属寺院等を考え併せ、旧藩所領とむすびつけて考察すると判然と分るものである。大野川口一帯に於ける豊後切支丹のこのようなかくれた材料をきわめて、現実の社会環境を見た時、人間関係にどれ丈大きな影響を及ぼして来たかを感じとれるであろう。なお、実証的な史料については次に紹介したいと思う。史実の究明にもう一歩分析して、研究するつもりである。

一九五五年二月（佐賀関西小教諭）